保存版

八重瀬町 防災マップ

令和3年12月

避難時の注意点・避難情報

防災情報はいろいろあるけどいつ避難すればいいの？

水害・土砂災害の防災情報の伝え方がかわります

逃げ遅れゼロへ　警戒レベル4で全員避難!!

［警戒レベル］で避難のタイミングをお伝えします。

町では、皆さんの命に危険が及ぶと判断した場合、「避難準備・高齢者等避難開始」、「避難指示」を発令し、皆さんに避難を促します。
町から［警戒レベル3、4］が発令された地域にお住まいの方は、速やかに避難してください。

- 警戒レベル1　心構えを高める（気象庁が発表）
- 警戒レベル2　避難行動の確認（気象庁が発表）
- 警戒レベル3　高齢者等は避難！　避難に時間を要する人は避難（市町村が発令）
- 警戒レベル4　全員避難！　安全な場所へ避難（市町村が発令）

［警戒レベル5］（市町村が発令）は既に災害が発生している状況です。

洪水・土砂災害での避難の仕方

歩ける深さは50cm!!
歩ける水深は平均約50cm。
水がひざまで来たら助けを呼び、高い所で救助を待ちましょう！

履き物に注意！
裸足、長靴は禁物です。
ひもでしめられる運動靴が良いでしょう。

ロープでつなげる！
はぐれないようにお互いの身体をロープで結んで避難しましょう！
また、水面下には危険が潜んでいます。
長い棒を杖がわりに安全確認をしてください。

もしも、土石流に遭遇したら

◆◆◆逃げ方に注意しましょう！◆◆◆

土石流は流れるスピードが速いため、流れを背にして逃げたのでは追いつかれてしまいます。土砂の流れる方向に対して、直角に逃げる等、逃げ方に注意しましょう。

命を守るために情報の収集に努めてください

特別警報は、自治体や報道機関を通じて伝えられます。テレビやインターネット、自治体から発信される情報の収集に努めてください。

「特別警報が発表されない」は「災害が発生しない」ではありません。
特別警報が発表されないからといって安心することは禁物です。

これまでどおり注意報、警報、その他の気象情報を活用し、早めの行動をとることが大切です。
普段から避難場所や避難経路を確認しておきましょう。

※気象庁HPより一部を抜粋して掲載

土砂災害・ため池

土砂災害警戒情報が発表されていなくても、ふだんと異なる状況「土砂災害の前兆」に気づいた場合には、直ちに周りの人と安全な場所へ避難しましょう。また、日ごろから危険箇所や避難場所・避難経路を確認しておくことも重要です。

がけ崩れ

地中にしみ込んだ水分が土の抵抗力を弱め、雨や地震などの影響によって急激に斜面が崩れ落ちることをいいます。がけ崩れは突然起きるため、人家の近くで起きると逃げ遅れる人も多く、被害者の割合も高くなっています。

土石流

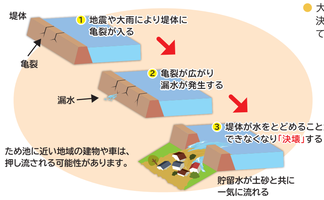
山腹・川底の石や土砂が長雨や集中豪雨などによって一気に下流へと押し流されることをいいます。その流れの速さは規模によって異なりますが、時速20～40kmという速度で一瞬のうちに人家や畑などを壊滅させてしまいます。

地すべり

斜面の一部あるいは全部が、地下水の影響と重力によってゆっくりと斜面下方に移動する現象のことをいいます。一般的に移動土塊量が大きいため、甚大な被害を及ぼします。また一旦動き出すと、これを完全に停止させることは非常に困難です。

ため池決壊のメカニズム

ため池の決壊は主に大雨と地震によって引き起こされます。
決壊の原因とそのメカニズムを知って、災害時に備えましょう。



- 大きな地震や大雨によって、万が一にもため池の堤体が決壊した場合、一度にたくさんの水や土砂が下流に向けて流れ出します。
- ため池に近い場所では、水の流れが早く、押し流す力も強いため、建物や車でさえも流される可能性があります。
- 水の流れが毎秒1メートルを超えると、50cmの水深でも立っていることができなくなります。速やかに避難しましょう。

東日本大震災では…
福島県の藤沼貯水池が決壊し、8名の人命が失われました。池の決壊は甚大な被害をまねくおそれがあります。

地震・火災

地震発生時の時間経過別行動マニュアル

地震発生

最初の大きな揺れは約1分間
- まず、身を守る安全確保　手近な座布団などで頭を保護
- すばやく火の確認　ガスの元栓、コンセント
- 大きな揺れの場合は、身の安全を確保し、すばやく屋外の安全な場所に一時避難する

1～2分　揺れがおさまったら
- 火元を確認　火が出たら、落ち着いて初期消火
- 家族の安全を確認　倒れた家具の下敷きになっていないかを確認
- 靴をはく　室内の中はガラスの破片が散乱。靴や厚手のスリッパをはく
- 避難するときは、屋根瓦・ブロック塀・自動販売機等に注意
- 津波などの危険が予想される地域はすぐ避難

3分　みんなの無事を確認　火災の発生を防ぐ
- 出火防止　初期消火　消火器を使う　バケツリレー
- 漏電・ガス漏れに注意　余震に注意

5分　ラジオなどで正しい情報を得る
- 大声で知らせる　救出・救護を　防災機関、自主防災組織の情報を確認
- デマにまどわされないように　避難時に車は極力使用しない
- 電話は緊急連絡を優先する

10分　協力して消火活動、救出・救護活動
- 水、食料は蓄えているものでまかなう　3日間の飲料水と食料の備蓄をしておく
- 災害・被害情報の収集　無理はやめよう
- 助け合いのしが大切　壊れた家に入らない

数時間

3日

ホテルの中
- 揺れを感じたら、身の安全を確保し、すばやく屋外の安全な場所へ避難する。
- 裸足で歩き回らない（ガラスの破片などでケガをする）。

劇場・ホール
- カバンなどで頭を保護し、座席の間に身を隠し、係員の指示を聞く。
- あわてずに冷静な行動をとる。

デパート・スーパー
- カバンなどで頭を保護し、ショーウィンドウや商品などから離れる。柱や壁ぎわに身を寄せ、係員の指示を聞き、落ち着いた行動をとる。

路上
- その場に立ち止まらず、窓ガラス、看板などの落下物から頭をカバンなどで保護して、空き地や公園などに避難する。
- 近くに空き地などがないときは、周囲の状況を冷静に判断して、建物から離れた安全性の高い場所へ移動する。
- ブロック塀や自動販売機などには近づかない。
- 倒れそうな電柱や垂れ下がった電線に注意する。

車を運転中
- ハンドルをしっかりと握り、徐々にスピードを落とし、緊急車両などの通行スペースを確保し、道路の左側に止め、エンジンを切る。
- 揺れがおさまるまで冷静に周囲の状況を確認して、カーラジオで情報を収集する。
- 避難が必要なときは、キーはつけたまま、ドアロックもしない。車検証などの貴重品を忘れずに持ち出し、徒歩で避難する。

海岸付近
- 高台へ避難し津波情報をよく聞く、注意報・警報が解除されるまでは海岸に近づかない。

バスなどの車内
- つり革や手すりに両手でしっかりつかまる。
- 途中で止まっても、非常コックを開けて勝手に車外へ出たり、窓から飛び降りたりしない。
- 乗務員の指示に従って落ち着いた行動をとる。

消火栓の使い方

粉末・強化液消化剤の場合

消火栓のかまえ方
- 風上に回り風上から消す。炎にはまともに正対しないように。
- やや腰を落して姿勢をなるべく低く。熱や煙を避けるように構える。
- 燃え上がる炎や煙にまどわされずに燃えているものにノズルを向け、火の根元を掃くように左右に振る。

非常時持ち出し品の準備＆チェック

いざというときすぐに持ち出せるように、日ごろから準備・点検しておきましょう。
事前に準備出来ているか、チェック☑しましょう。

非常時持ち出し品（例）

携帯ラジオ

- □ ラジオ
- □ 電池（多めに用意）

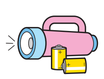
救急医療品

- □ 常備薬　□ 包帯
- □ 傷薬　□ 手指消毒用アルコール
- □ 鎮痛剤

貴重品

- □ 現金　□ 預金通帳
- □ 印鑑　□ 免許証
- □ 健康保険証

懐中電灯



- □ 懐中電灯（できれば一人にひとつ）
- □ 電池（多めに用意）

非常食品等

火を通さないで食べられるもの、食器など

- □ 非常用食品　□ 紙皿　□ ミネラルウォーター
- □ 缶切り　□ 缶詰　□ 紙コップ

その他

- □ 衣類（下着・上着など）
- □ 生理用品
- □ 離乳食
- □ マスク
- □ 石鹸・ハンドソープ
- □ 体温計
- □ ウェットティッシュ
- □ ラップフィルム（止血や食器にかぶせて使う）
- □ 防災マップ（本書）
- □ タオル
- □ 乳幼児製品
- □ カッパ
- □ ライター
- □ 携帯電話の充電器
- □ 筆記用具
- □ 記録用ノート
- □ ビニール袋（大小）

非常時用備蓄品（例）

災害復旧までの数日間（最低3日）を生活できるようにチェック☑しましょう。

飲料水

- □ 飲料水としてペットボトルや缶入りのミネラルウォーター（1人1日3リットルを目安に）
- □ 貯水した防災タンクなど

非常食品

- □ お米（レトルト・アルファ米も便利）
- □ 缶詰・レトルト食品
- □ 梅干し・調味料など
- □ ドライフーズ・チョコレート・アメ（菓子類など）

燃料

- □ 卓上コンロ
- □ ガスボンベ
- □ 固形燃料

その他

- □ 生活用水（風呂・洗濯機などに貯水）
- □ 毛布・寝袋・洗面用具・ドライシャンプーなど
- □ 調理器具（なべ・やかんなど）
- □ バケツ・各種アウトドア用品など

定期点検！　非常時持ち出し品は定期的に点検を！

避難生活が長引くときに便利なもの	携帯トイレ、使い捨てカイロ、裁縫セット、ガムテープ、地図、さらし、筆記用具（マジックなど）スコップなど。
大規模災害で役に立ったもの	ポリタンク、ホイッスル、予備の眼鏡・補聴器、ビニールシート、新聞紙、補助用具としてロープ、スコップ、バールやハンマー、のこぎり、車のジャッキなど。

非常時持ち出し品は、使用するときに支障のないように、定期的に点検しておきましょう。
とくに食品や飲料水の賞味期限はまめにチェックし、賞味期限がせまったものから順に入れ替えておきましょう。

防災マップの使い方と自主防災組織

防災マップの使い方

1 まず、自宅の位置を確認しましょう。
災害が想定される位置を確認しましょう。
自宅がある場所は、どのような災害が予想されるのかを、地図をみて確認しましょう。

2 次に、自宅付近の避難所を確認しましょう。
自宅に一番近い災害に応じた避難所を地図で確認しましょう。

3 災害想定区域を避けて、避難経路を決めましょう
避難経路を地図で確認し、土砂災害や津波などの災害が想定される場所を避けて避難できるようにしましょう。

4 実際に避難経路を歩いてみて、安全を確認しましょう
家庭や地域で話し合いながら、実際に歩いてみましょう。
避難経路に危険な場所がある場合には、避難経路を見直しましょう。

自主防災組織

災害に強い地域を作りませんか？

地域の防災力

災害発生時には、自助・共助・公助の連携により人的・物的被害を軽減することができます。
ひとたび大規模な災害が発生したときには、公的機関が行う活動（公助）は交通網の寸断や同時多発火災などにより十分対応できない可能性があるため、個人の力で災害に備える（自助）とともに、地域での助け合い（共助）による地域の防災力が重要となります。
災害に強い地域づくりを目指して、災害時の被害を軽減するため、「自主防災組織」活動を通じて、共助の強化、地域の防災力の強化に向けた取組を始めてみませんか？

1 自主防災組織とは？
- 災害発生時はもちろん、日頃から地域の皆さんが一緒になって防災活動に取組むための組織を「自主防災組織」と言います。
- 平常時には防災訓練や広報活動、災害時には初期消火、救出救護、集団避難、避難所への給食給水などの活動を行います。

2 なぜ、自主防災組織が必要なの？
- 大規模な災害が発生した場合、消防署などの防災機関だけでは、十分な対応ができない可能性があります。
このような時、地域の皆さんが一緒になって協力し、災害や避難に関する情報の伝達、避難誘導、安否確認、救出・救護活動に取組むことで被害の軽減を図る事ができます。また、活動を迅速に進めるためには「お互いに顔の見える関係」の中で、事前に地域内で役割分担を決めておくことが有効です。より効率よく、さまざまな活動をするためにも事前の準備（＝体制づくり）が重要です。

津波・高潮

気象庁では、津波による災害の発生が予想される場合に、地震が発生してから約3分後を目処に津波警報（大津波、津波）または津波注意報を発表します。

津波警報・注意報の種類

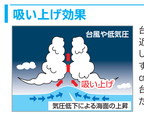
種類	発表基準	発表される津波の高さ：数値での発表（津波の高さ予想の区分）	発表される津波の高さ：巨大地震の場合の発表	想定されるべき行動と取るべき行動
大津波警報	予想される津波の高さが高いところで3mを超える場合。	10m超（10m ＜予想高さ）	巨大	陸域に津波が及び浸水するおそれがあるため、沿岸部や川沿いにいる人は、ただちに高台や避難ビルなど安全な場所へ避難する。警報が解除されるまで安全な場所から離れない。
		10m（5m ＜予想高さ≦ 10m）		
		5m（3m ＜予想高さ≦ 5m）		
津波警報	予想される津波の高さが高いところで1mを超え、3m以下の場合。	3m（1m ＜予想高さ≦ 3m）	高い	
津波注意報	予想される津波の高さが高いところで0.2m以上、1m以下の場合であって、津波による災害のおそれがある場合。	1m（0.2m ≦予想高さ≦ 1m）	（表記しない）	陸域では避難の必要はない。海の中にいる人はただちに海から上がって、海岸から離れる。海水浴や磯釣りは危険なので行わない。注意報が解除されるまで海に入ったり海岸に近付いたりしない。

※ 大津波警報は特別警報に位置付けられています。

高潮が発生する仕組み

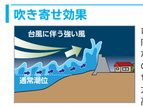
高潮とは、台風や発達した低気圧の接近により、海面が異常に高くなる現象です。高潮が発生するとその高い潮位と波浪・強風により、海水が堤防を越えるようになり、背後地が浸水する可能性が高くなります。また、高潮が発生している海域に流れ込む河川があれば、高い潮位や波浪により河川の流れが阻害されます。そのため、川沿いではんし濫が発生し、海岸から離れた内陸部にまで被害を及ぼすこともあります。

吸い上げ効果



台風や発達した低気圧の中心が接近すると、中心付近の気圧が低下し、海面が吸い上げられて上昇します。気圧が1hPa低下すると海面は1cm上昇します。例えば、950hPaの台風が接近すると、1000hPaだった時より50cm海面が上昇します。

吹き寄せ効果



台風による強い風が沖から海岸に向かって長時間吹き続けると、海水が海岸に吹き寄せられ、海岸付近の海面が異常に上昇します。吹き寄せ効果は風速や海岸の状況により大きく異なり、V字型の湾の奥ほど高くなります。

高潮をもたらす台風

高い場所へ速やかに避難する
より高い場所へ、より海から遠い場所へ速やかに避難しましょう。

なるべく徒歩で避難する
車では洗滞や危険を招く可能性があるため、なるべく徒歩で避難しましょう。

正しい情報を入手する
防災行政無線やテレビ、ラジオなどから正しい情報を入手しましょう。

河川や海岸には近づかない
地震の発生や、警報・注意報が発表された場合、海岸や河川は危険ですので、釣りや海水浴を行っている方は、速やかに海岸から離れ、高い場所へ避難しましょう。

避難指示に従う
避難指示が発令されたらただちに指示に従い、安全で高い場所に速やかに避難しましょう。

風水害・台風

大雨や強風はわたしたちに何度も大きな災害をもたらしています。
ふだんから気象情報に十分注意し、避難の際もみんなで協力しましょう。

まずは、確実な情報が大事
その次に迅速な対応

大雨情報をキャッチ！
こんなときのわが家の安全対策。

大雨注意報
大雨による土砂災害や浸水害が発生するおそれがあると予想される場合

大雨警報
大雨による重大な土砂災害や浸水害が発生するおそれがあると予想される場合

大雨特別警報
台風や集中豪雨により数十年に一度の降雨量となる大雨が予想される場合、若しくは、数十年に一度の強度の台風や同程度の温帯低気圧により大雨になると予想される場合に発表

雨の強さと降り方

（1時間雨量：mm）

10mm以上～20mm未満	20mm以上～30mm未満	30mm以上～50mm未満	50mm以上～80mm未満	80mm以上～
雨の音で話し声がよく聞き取れない。	ワイパーを速くしても見づらい。側溝や下水、小さな川があふれる。	山崩れ、がけ崩れが起きやすくなり危険地帯では避難の準備が必要。	マンホールから水が噴出する。土石流が起こりやすい。多くの災害が発生する。	雨による大規模な災害の発生する恐れが強く、厳重な警戒が必要。

風の強さと吹き方

（平均風速：m／秒）

10m/秒以上～15m/秒未満	15m/秒以上～20m/秒未満	20m/秒以上～25m/秒未満	25m/秒以上～
風に向かって歩きにくくなる。傘がさせない。	風に向かって歩けない。転倒する人もいる。	しっかりと身体を確保しないと転倒する。風で飛ばされた物で窓ガラスが割れる。	立っていられない。屋外での行動は危険。樹木が根こそぎ倒れはじめる。

台　風

（平均風速：m／秒）

日本には毎年多数の台風が接近あるいは上陸し、たびたび大きな被害をもたらします。
台風の接近が予想される際は、台風情報に十分注意し、被害のないように備えることが必要です。

大きさ	風速15m/秒 以上の半径
大型（大きい）	500km以上～800km未満
超大型（非常に大きい）	800km以上

強さ	最大風速
強い	33m/秒 以上～44m/秒 未満
非常に強い	44m/秒 以上～54m/秒 未満
猛烈な	54m/秒 以上

集中豪雨

集中豪雨は、限られた地域に、突発的に短時間に集中して降る豪雨で、梅雨の終わりごろによく発生します。
発生の予測は比較的困難で、中小河川の氾濫、土砂崩れ、がけ崩れなどによる大きな被害をもたらすことがありますので、気象情報に十分注意し、万全の対策をとることが必要です。

- ラジオやテレビなどの気象情報に注意する。
- 町や防災関係機関の広報をよく聞いておく。
- 停電に備え懐中電灯や携帯ラジオを用意する。
- 非常時持出品を準備しておく。
- 早く帰宅し、家族と連絡を取り、非常時に備える。
- 飲料水や食料を数日分確保しておく。
- 浸水に備えて家財道具は高い場所へ移動する。
- 危険な地域では、いつでも避難できるよう準備をする。

つねに気象情報には、注意しておきましょう！